

障がい児(者)とのふれあい経験が与える影響の研究

学籍番号 1007049

齋藤愛里彩

【目的】 現在の日本の社会福祉における考え方のひとつに「ノーマライゼーション」という理念がある。これは、障がい児(者)と健常児(者)は、互いに区別されることなく、社会での生活を共にすることが正常であり、本来の望ましい姿であるという考え方である。

その結果、街の商業施設や企業、公共交通機関などでは障がい児(者)のことを考え、点字や点字ブロックを用いた案内や、エレベーター・スロープ等の導入、バリアフリー等の充実が図られるとともに、教育現場においても障がい児(者)と健常児(者)を交流させ、互いの理解を図ろうとする交流教育も行われてきている。

しかし、いまだに障がい児(者)への差別・偏見は存在し、適切な支援がなかなか行われないという現状がある。そこで、障がいについて理解するにあたり、障がい児(者)とのふれあい経験について着目し、障がい児(者)との関わりが、健常児(者)の態度形成や障がいへの理解、さらには進路選択に影響を与えるのかを考える。

本研究では、大学で福祉を学ぶ福祉学生と、福祉について学ばないその他の学部に通う学生(経済学部、文学部など)では、障がい児(者)に対する態度や障がい児(者)への理解にどのような違いがあるのかを研究していくこととする。

以下、本研究で検証する仮説を示す。

- ① 福祉学部と非福祉学部では、障がい児(者)に対する態度に差があるのではないかと。
- ② ふれあい経験の有無によって、障がい児(者)に対する態度に差があるのではないかと。
- ③ 障がい理解のある学生は、障がい児(者)への態度も好意的なのではないかと。

【方法】

徳田(1990)の多次元的态度尺度を参考に、質

問紙法で調査を行った。

札幌市内と札幌近郊を含む4年制大学に在学中の学生290名(男性99名、女性191名)を対象とし、質問紙による調査を実施した。回答に不備のあったものを除き、分析に用いた被験者は、283名(男性96名、女性187名)である。その内約としては、福祉学部所属する学生133名(男性38名、女性95名)、非福祉学部所属する学生150名(男性58名、女性92名)であった。なお、被験者の学年の内約としては、1年生56名、2年生128名、3年生31名、4年生68名であった。

【結果と考察】 ①福祉学部の学生と非福祉学部の学生では、障がい児(者)に対する態度に差があるのではないかとという仮説において、学部によって必ずしも差が出るというわけではないが、特殊能力では、学部間ではっきり差がみられ、思いこみでは傾向があるとされる。よって、①は、特殊能力と思いこみという障がい児(者)に対する態度では差が見られることが実証された。②ふれあい経験の有無によって、障がい児(者)に対する態度に関係性があるのではないかとという仮説に対し、「受容的態度」「統合教育」「援助」において、ふれあい経験との影響があるとされ、「特殊能力」では、ふれあい経験が影響するという傾向が出たので、この仮説は、「思いこみ」という態度以外において、実証されることがわかった。③障がい理解のある学生は、障がい児(者)への態度も好意的なのではないかとという仮説に対し、「受容的態度」「援助」「思いこみ」において、障がい理解が態度に影響することから、この仮説は実証される。障がい理解があるということは、障がいに対して好意的であり、理解があるために、障がい児(者)が周囲から支援されることにおいても理解する気持ちがあるのではないかと考えられる。

(指導教員 豊村 和真 教授)